

高校の魅力化のキセキ ～高校の魅力化ビジョンの取組を通して～

岩手県立西和賀高等学校 校長 助川剛栄

1 はじめに

令和3年10月に岩手県教育委員会から、いわての高校魅力化グランドデザイン for2031 策定の通知があった。令和の日本型学校教育の構築を目指す中央教育審議会の答申が1月にあり、高校の特色化・魅力化ということばを意識しはじめていた時期ではあった。学校の立ち位置を再確認し特色ある学校経営とは何かという問いからの始まりであった。

西和賀高校は岩手県内でも消滅可能性が高い地域として話題になった町にある。しかし、地域に支えられ、地域と協働する高校の魅力化推進の中で、令和6年度入学生の高校入試では40名定員の小規模校でありながら1.23倍という倍率の入試となり、今後の入学者数も期待できるとして来年度の令和7年度入学生から80名定員とする県の決定があり、異例の定員増となった。高校の魅力化が示される中で本校の取組の軌跡を振り返るとともに、高校の魅力化の在り方について考察したい。

2 西和賀高等学校とその地域

西和賀町は2,200世帯、人口4,700人程度で岩手県北上市と秋田県横手市に挟まれた奥羽山脈の中にある。町内には中学校が2校で町外の高校に通学困難な地域もあり、西和賀高校は地域の高校教育機関として存在してきた。西和賀高等学校は昭和23年に定時制の分校として発足。昭和47年に全日制普通科として独立。その後52年目を迎えている。近年は2学級規模であったが、人口減少の中で平成30年から1学級校として現在に至っている。

<西和賀高等学校入学者推移>

	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6
入学者定員	80	40	40	40	40	40	40	40
入学者数	30	39	36	30	33	36	29	44

3 西和賀高校の魅力化の取組

いわての高校魅力化グランドデザイン for2031 に基づき、西和賀高校の特色化・魅力化ビジョンの策定がなされた。確かな学力・生きる力・個別最適な学習環境・キャリア教育を根底にしてスクールポリシーのなかで次の3つのポリシーを明示した。

「グラデュエーション・ポリシー」として、主体性・協働性・探究力。

「カリキュラム・ポリシー」として、教科の基礎の徹底・人生百年時代の生き方の模索・西和賀の魅力と課題の探究。

「アドミッション・ポリシー」として、学ぶ意義の理解と意欲的に取り組む生徒・自己を大切にし、他者を思いやり協働できる生徒・地域社会に関心を持ち将来に豊かな想像力を持つ生徒。

さらに、「特色ある教育課程」として、いのち輝く百年創造塾と題し、総合的な探究の時間を設定した、そして、それぞれの内容について具体的に内容を確認した。。

「グラデュエーション・ポリシー」については、アクティブラーニングをへてICT教育の導入があり、一人一台端末の学習環境の整備とともに、主体的で協働的な学びの実践に結び付けていくこととした。また、探究力については総合的な探究の時間を中心とした実践を確認。

「カリキュラム・ポリシー」については、以前から実施している1年生と2年生の英語と数学における3グレードに分かれての習熟度別授業による教科の基礎の徹底を継続することとした。キャリア教育と地域課題の探究については総合的な探究の時間を活用して、地域協働を基本とした地域人材や企業や大学関係者の招聘をすることでキャリア教育につなげることとした。

「アドミッション・ポリシー」については、自己を模索しながらも成長を求め挑戦する生徒、地域活動の中で成長したい意欲のある生徒、を求めることを中学校側に明確に伝えるとともに、高校としても成果による評価に偏らずに、取組を見取することで観点別評価を行うことを確認した。

<西和賀高等学校 特色化・魅力化ビジョン スクールポリシー>

スクール・ポリシー

グラデュエーション・ポリシー ～ 学校教育目標のもと、次の資質・能力等を伸ばします～

- (1) 主体性
豊かな感性と当事者意識をもって自ら課題を設定し、その解決に向けて粘り強く取り組む力
- (2) 協働性
多様性を尊重するとともに自己を表現し、対話を通じて考えを深め、新たな価値の創造に向かう力
- (3) 探究力
地域から学び、知識・技能を活用して論理的に思考し、持続可能な社会をつくろうとする姿勢

カリキュラム・ポリシー ～ 少人数による授業と地域との連携・協働を基盤に、次の学びを実践します～

- (1) 教科の基礎の徹底
少人数クラス編成と習熟度別授業による個を重視した学び
- (2) 百年の生き方の模索
幅広い進路希望に対応する教育課程と地域との関わりを通じた多様な生き方との出会い
- (3) 西和賀の魅力と課題の探究
地域を題材とした協働的な学習により、思考、実践、発信を繰り返す深い学び

アドミッション・ポリシー ～本校の特色を理解し、自分の意志を持ち、入学を強く希望する生徒を求めます～

- (1) 学ぶ意義を理解し、意欲的に学習に取り組むことができる生徒
- (2) 自分を大切にし、他者を思いやり、協力して物事に取り組むことができる生徒
- (3) 地域社会に関心を持ち、未来に対する豊かな想像力を持った生徒

そして、いのち輝く百年創造塾については、開かれた教育課程のもと地域協働による探究活動であり、地域創生に寄与する人材を育成する実践的かつ探究的学習プログラムであることを意識することとし、地域課題等について地域で活動する方との対話による深い学びの協働の中で仮説を立て、検証し、成果を発表する活動を積み重ねていく。企業や大学関係者に来校していただき対話的な活動やフィールドワークを実施する中でより深い思考と判断につなげていく実践として計画を立てた。

さらに、本校は西和賀町役場からの多くの支援を受けており、この支援についても、高校の魅力化を推進するための視点に立ち、取組について役場と高校で仕分けを実施し共通理解を図った。学校での基礎基本の習得、個別の進路にあわせた公営塾や添削指導による個別最適化の学びを保障する行政と学校による環境づくりと連携は生徒の進路実現に結びついており、大学受験から就職まで全ての進路達成に対応する進路多様校として生徒と保護者から信頼される実績となっている。

限られた人員と財源を確認し、ポリシーの達成に向けて何ができるのか、何をしなければならないのか。学校内ばかりではなく地元行政や魅力化協働パートナーとも立ち位置を確認し合うことで共通理解が進ん

特色ある教育課程

いのち輝く百年創造塾 (総合的な探究の時間)

〇西和賀町をフィールドとして、地方創成に寄与する人材を育成する実践的・探究的学習プログラム

- ・地域人材との連携・協働、地域資源の活用。
- ・地域社会に対する理解を深め、自ら問いを形成し、課題を設定。
- ・フィールドワーク等の実践的学習と、課題解決に向けた探究活動。
- ・西和賀町の魅力の再発見と発信。
- ・社会の一員としての自己の在り方生き方の探究。

だことはその後の円滑な学校活動につながった。

4 志願者数に対する仮説

学校の方向性は策定した。しかし生徒数の減少は続いている。志願者の増加についてどのように把握して対応すべきなのか。少子化の中で志願者を維持することは可能なのか。高校の魅力化の取組のなかで、本校として選ばれる学校になるための取組については再確認した。しかし、間違いなく進んでいる人口減少の中で入学生の確保という大きな課題が立ちふさがった。

多くの統計資料が示される中で、本校を志願する中学生の志向にまず注目した。岩手県の示す県立高等学校教育のあり方検討会の資料によれば、県立高等学校の在り方として、生徒が進路希望を達成する教育保障。新しい時代に求められる資質能力の育成。地域協働による高校魅力化の推進の視点が示されている。さらに、県の示す統計によれば、中学生が進学を希望する高校の学校規模として、令和5年度調査では、1学級校12%、2～3学級校28%であり、平成30年調査の1学級校9%、2～3学級校22%に比べて上昇しており、中学卒業生のなかの一定数が小規模校への入学を希望していることが示されていた。この統計資料は中学生にとって小規模校は進学選択として検討されており、小規模校の存在意義があるのではないかという期待を抱かせることになった。

そして本校に通う中学生が属する北上市の中学生の卒業人口は、令和6年で841名、令和11年で794名、令和16年で689名、推計の出ている最後の令和19年で549名とあり、10%強が小規模校に入学を希望していると考えた場合に、地元西和賀町の中学卒業生と隣接の北上市内の中学卒業生が本校を志望する人数として40名から60名程度が見込まれる可能性を見出した。さらに隣接学区となっている横手市内の中学校の状況を聴き取る中で、小規模小学校で生活した生徒が大規模中学校に集約され、環境の変化に戸惑い、高校は小規模校への入学を考える可能性が出てきていること、秋田県では中大規模校に集約していく方向性の中で小規模校の高校が少なくなっており中学生の進路の選択肢が限られ、隣接学区である小規模校の本校に対する関心が高いことを知った。

地元を含め学区内の生徒の小規模校希望者の割合、隣接学区の横手市の中学生の動向、町が運営する温泉付きの寮の魅力とあわせて志願する県外生徒や、県内の学区外生徒の動向などを総合し推定することで、現在の在籍生徒が多い西和賀町や北上市の中学生志願者が割り込んだとしても一定の志願者が確保できる可能性があるという結論に至った。

<西和賀高校学区北上市中学卒業生数推移>

年	R6	R7	R8	R9	R10	R11	R12	R13	R14	R15	R16	R17	R18	R19
人数	841	825	803	784	788	794	777	729	743	684	682	633	564	549

さらに、本校の属する学区における中学生の動向統計のなかで、令和3年度から令和5年度の平均として、学区からの中学生卒業時の転出240名、学区への中学生卒業時の転入459名であり、219名の高校入学生徒数の増加がみられる。そして学区である北上市における中学校卒業生数の減少率は推移の資料から見れば他地域に比べて緩やかであり。本校とすれば中学校卒業生に対して魅力化のコンセプトを明確にすることで一定数の志願が見込まれるのではないかと考え、北上市内の中学卒業生数の10%に響く魅力発信を行うことで50名から60名程度の志願者を最低ラインとして学校経営の魅力の深化と広報活動を行うことにした。

また時を同じくして、西和賀町役場では令和3年度から地域みらい留学による県外募集を開始した。令和3年度には一人一人が主役であるという小規模校の魅力を前面に出したが中学生からの反応が薄い。県外募集を実施している学校のそのほとんどが小規模校。小規模校であることを魅力としても差別化は図れないことを再確認。習熟別授業による確かな学力保障。地域協働の中での総合的な探究活動。個に応じたキャリア教育と確かな進学実績。学区内の生徒と同様に魅力化のコンセプトを明確に

して小規模校の中での差別化を図った。初年度は志願者なしであったが、コンセプトを整えて2年目に5名の志願者となり、3年目の今年も昨年並みの志願者申し込みが見込まれている。

5 令和6年度入試の状況

令和6年度入試において40名の募集定員に対して推薦入学に1名出願、一般入試に49名出願となった。この中には県外から5名の出願が含まれる。最終的に44名の合格。入学者からの聴き取りによれば、習熟度別授業や地域協働での探究活動そして進学実績が受験生の魅力としてとらえられた成果であった。示したコンセプトに対してねらい通りの回答であり、地域の中学生の高校選択の志向を理解し、50名程度に響くことを意識して学校の魅力を精査した結果が示された。

6 少子化の進む小規模校の存在価値

人口減少の中で過疎地域の高校の存続問題は深刻である。統廃合の中で中規模校以上の学校が増えていく。しかし、通学困難な地域環境、大人数の中で埋もれていく生徒など、多様性が増していく社会状況の中で統廃合の対象となっていた小規模校の教育環境が見直されていることを実感した。そして、県外入学生の様子からは地域を超えて高校に入学することへの抵抗もなくなっている。

中学校までの教育環境の経験の中で、高校三年間に対して、成長できる地域環境と教育環境なのか。何を学ぶことができる教育課程なのか。地域協働で学ぶ環境があるのか。社会と関連づいた探究活動ができるのか。そして、高校卒業後の進路先については自己の可能性が広がるようなシステムになっているのか。中学生とその保護者は間違いなく人生100年時代のなかのキャリア教育という視点で高校選択を始めている。

7 西和賀高校のこれから

令和6年度9月実施の学校評価結果は以下のとおりである。

() は昨年同期の評価

	生徒	保護者	教員
分かりやすい授業がなされている	4.4 (4.4)	4.3 (4.2)	4.4 (4.2)
習熟度別授業等による一人一人の学力向上に努めている	4.4 (4.3)	4.5 (4.4)	4.6 (4.5)
総合的な探究の時間は課題を設定し意欲的に取り組める	4.4 (4.3)	—	4.6 (4.5)
多様な進路の実現に向けた支援がなされている	4.5 (4.5)	4.5 (4.4)	4.6 (4.5)
この学校に入学(勤務)して良かった	4.4 (4.4)	4.7 (4.7)	4.6 (4.3)
地域とともに魅力ある学校づくりに取り組んでいる	4.5 (4.5)	4.6 (4.7)	4.6 (4.4)

*評価は5段階の回答、5 と思う 4 どちらかといえばと思う 3 どちらともいえない

2 あまりそう思わない 1 そう思わない

本校の魅力化の柱とした、習熟度別授業等によるわかる授業の実践。地域と協働する総合的な探究活動の実践。キャリア教育の視点での進路指導。について一定の評価を得た。そして本校に対する満足度も評価としては低くない。

魅力化の取組にあたり基本としたことは「環境は人を育てる」との言葉だった。環境をつくる教職員、そして生徒と保護者、地域が意を同じくすること。成長できる場としての環境づくりと維持にむけての実践となった。定められた教員定数のなかでできることは限られている。できることを増やすのではなく、現在の教育課程を明確な方向性のもとで深化させることが大切である。そして、社会情勢の変化をとらえて柔軟に教育課程を運用させることが求められる。確かな学力の育成を前提として主体的な活動により成長できる環境を生徒と社会は求めている。